

# 明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能

## —石川県立第一高女同窓会誌の「会員消息」記事の分析から—

井上 好人

### 1. 問題の所在

“女学生第一世代”として脚光を浴びた明治期の女学生たちは、卒業後、母校とどのような関わりを持ち、級友たちや恩師とどのような交流を続けていたのだろうか。女学生文化を特徴づけるといわれる在学中の親密な交際圏は卒業後も機能し広がっていったのだろうか、あるいはそうではなく卒業後のそれぞれの境遇や地位が交際圏上のスタンスを規定していたのだろうか。

明治期に高等女学校を卒業した女性が、学歴エリートや地方名士の男性と結婚し、あるいは教員をはじめとする職業婦人になり、大正・昭和期中流階級の中核を形成していったことはよく知られている。それゆえ、この問いは、女性の交際圏という視点から、近代日本における中流階級の文化的エートスとその基盤を解明していく手がかりを含んでいる。だが、従来の教育社会学の関心は、主に男性の学歴取得による社会移動分析を通じた社会構造の変動の叙述に置かれ<sup>(1)</sup>、女性の学歴と階層移動あるいは社会的活動との対応関係については、実証の困難性もあいまって、これまでほとんど手がつけられてこなかった<sup>(2)</sup>。また、都市の中流階級を対象にした諸研究（例えば、佐藤（2004）、米村（1999））では、その主な構成員として高女卒の女性が想定されてきたが、もっぱら「教育家族」の担い手として子育てに専念する「母親」として、あるいは家計支出者として消費生活を担う「主婦」としてであり、家庭を離れた個人としての社会との関わりについては問われてこなかった。

ようやく近年、稲垣（2007）や貫田（2007）による高女卒業生を対象とした聞き

取り及びアンケート調査で、学校生活の共有された経験や文化、あるいは人的な繋がりに着目して女性の意識や意味世界とその変化をダイナミックに捉えようとする試みがなされるようになってきた。そこには、女学生たちが学課だけでなく、読書や音楽、美術などの幅広い教養に触れながら同級生との間で独特な「女学生文化」を形成していたこと、そして、卒業後も在学中に形成された親密な交友関係が現実生活とはリンクしない形で維持されてきたことが描かれている。だが、同研究の難点は、対象が昭和戦前期から戦中期の高女卒業生であることである。すなわち、卒業後のライフコースにおける級友との交友や同窓会での交流について、大正末から昭和初期に形成されたといわれる「新中間層」をはじめとした階層文化との関連が十分分析できず、彼女たちの活動に戦後的な意味や意義が含まれている可能性を払拭できないことである。これゆえ、明治期から昭和戦前期にかけて学歴ある女性であることの意味や社会に果たした役割の考察には、明治期に高等女学校を卒業した女性たちを分析の俎上にのせることが望ましいと考えられる。

そこで小論は、学校経験との連続性が高くまた身近な社会活動である高等女学校の同窓会を取り上げ、明治期に卒業した会員たちのその後、昭和初期までの同窓会や級友たちとの関わり、という観点から次の点を明らかにしたい。

第一に、同窓会員相互の交流の広がりや緊密さの程度はどれほどであったのか。戦後の同窓会活動に見られるごとく、対面的出会いはもちろん手紙や回覧などの通信媒体をも通して広く会員相互を結びつけていたのかどうか検証する。

第二に、同窓会活動に積極的でリーダー的な役割を引き受けてきた者とそうではなく疎遠であった者との間でどのようなプロフィール上の相違があったのか。会員に等しく開かれていたはずの同窓会活動へのコミットの程度を分析することによって、卒業後の社会的活動の機会が“高女卒”という同じ学歴資格だけではないどのような他の要因（社会的地位や出身背景など）によって開かれたり閉じられたりしていたのか、ひとつのケーススタディとして明らかにする。

## 2. 調査データと分析の方法

小論で取り上げるのは、石川県立第一高等女学校の同窓会組織「済美会」である。同高女は、1898（明治31）年に金沢市高等女学校として設立され、1901（同34）年に県立に移管、そして1913（大正2）年に「第一」の冠が被せられ、「一段高き所の品格と、技倆とを、現はすべき覚悟」のもと名実共に県下の「ファースト」に君臨した女学校である。「済美会」は、卒業生（「通常会員」）と教員（「特別会員」）から

## 明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能

成る組織であり、その目的として「会員ノ交誼ヲ親密ニシ品位ヲ進ムルヲ以テ主トナシ兼テ女子ニ関スル事項ヲ講究スルモノトス」と謳われていた。会長に校長を推戴し、卒業生からは金沢市（およびその近郊）在住の同期生代表が「議員」として予算案や重要議案の評議にあっていた（その中の「幹事」が庶務・会計を担当）。「済美会」という名称は、1910（明治43）年に竣工した新築講堂「済美堂」の名に因んで、会長兼校長であった土師雙他郎が命名した。同窓会誌も同年に『済美会誌』と改名されている。同誌は、1902（同35）年に発刊されて以来、年1回ずつ刊行されてきている（以下、『会誌』、発行年を省略し号数のみ記載）。

本分析には、1898（明治31）年から1914（同45）年に入学（編入学を含む）した生徒2206人（卒業生数1475人、卒業率67%）についての『学籍簿』と『学級台帳』から作成したデータベース（以下、「データベース」）を利用する。これは、族籍、本籍地、住所、親職業、納税額（一部）、成績（各教科10段階評点のトータルの平均点）、操行（「甲、乙、丙、丁」4段階の行動評価のうち卒業学年のもの）等の項目からなる個票データである<sup>(3)</sup>。これによって、各人のプロフィールに出身背景や在学時の学業状態といった変数を加えることが可能になる。

さて、小論は『会誌』記事全般を利用するが、とりわけ「会員消息」欄に着目する。同欄は、卒業年度別に記された各会員の近況報告で、その端緒は、第6号の「雑録」中での「会員諸姉の近況」であり、また「在大阪会員の状況」として地方在住会員の状況が報告されている。「会員消息」として記事が独立するのは第9号になってからであり、卒業年度別に書かれるのは第10号からである。『会誌』に占める「会員消息」欄の対総ページ比率の推移は表1に示す通りである。また、同記事は、大正末期あるいは昭和初期までは、「動静伺い葉書」の往来という方式ではなく、執筆者（クラス代表「議員」）の個人的な交友関係や情報網に依存して書かれていた。この状況を利用して、大正末期までの期間について次の点を明らかにする。

第一に、同記事に表出されている一定期間内の対面的出会い、手紙、通信、噂話の頻度・程度を指標として、代表者を中心とした級友間の紐帯の強さや広がり度を測る。第二に、同記事への記載者／非記載者、さらに同窓会活動

表1 同窓会誌に占める「会員消息」欄の比率（%）

年	号	「会員消息」 記事の割合	総ページ数
1907年	6号	7%	82ページ
1911年	10号	15%	68ページ
1913年	12号	23%	53ページ
1917年	16号	67%	59ページ
1919年	18号	50%	81ページ
1927年	26号	70%	219ページ
1936年	35号	67%	117ページ

注) 分母の「総ページ数」は「会員住所」欄を除いている。

に熱心で相互交流の結節点に位置していた人／活動には疎遠であった人をピックアップし、「データベース」と照合して、両者間のプロフィール上の相違を析出する。さらに、記事内容の質的分析も加え、同窓会活動に積極的にコミットすることの社会的意味を明らかにする。

分析に入る前に、『済美会』の活動内容と意味づけ、これに対する会員の参加動向について、次節で概観しておこう。

### 3. 同窓会活動の理念と参加者の態度

#### 3.1. 金沢での「集会」と地方での「支部会」活動

同窓会「集会」は、8月の「総集会」を中心に年4回、金沢にて開催され(1916(大正5)年まで、翌年からは年3回)、会員相互の親睦(「會員ノ談話ヲ交換」)を深める機会が設けられていた。1910(明治43)年の「夏季総集会」は次のようであった。9時に副会長(主席教諭)の開会の辞、帰省中の女子高等師範学校在学生による「食卓の改良」のスピーチ、次いで補修科生の唱歌、会員のオルガン独奏、一同卓を囲んで昼食、午後は、会員の弾琴、補修科生による余興、蓄音機を聴きながらの役員改選、そして来賓講師による「家族団欒」についての講話、狂言、米国帰りの会員による経験談とその娘による舞踏を経て、後庭での記念写真撮影、再度、会場にて君が代の斉唱で閉会となった(『会誌』第9号)。

この記事から当時の「集会」は、華やかな親睦的な雰囲気とともに、上級学校進学者の談話や来賓講師の説話をプログラムに盛り込み、高女卒に相応しい教養や振る舞い、良き趣味の持ち方などが教示される趣向であったことがわかる。

次に、支部会が全国各地に結成されるのは、1917(大正6)年頃からで、『会誌』にも独立したトピックとして記事が書かれるようになる(「東京支部会」、「名古屋会」、「大阪支部会」、「江沼能美石川連合支部会」(『会誌』第16号))。1928(昭和3)年頃までに支部会は22箇所、石川県内の10箇所を除けば地方に12箇所(米国、大連、朝鮮、大阪、神戸、呉、姫路、京都、東京、長崎、福井、富山)設けられる。このうち最も活発で華やかな活動を続けた「東京済美会」を取り上げてみよう。

1914(大正3)年に「東京に於ける済美会支部会」(『会誌』第13号)記事が、校長兼会長の報告文として載せられている。(この出席者の分析は4.3.で行う)。「高等女学校長會議開會の八九日前の頃に、在京済美會員の方より、同會期中の土曜か日曜に、在京済美會支部會を催したいから、繰合せて出席する様にと申して参りました。…(中略)…会場は女子高等師範学校、時刻は午後一時…(中略)…導かる」

## 明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能

まゝに会場なる櫻蔭会の事務所に入りますと、多数の会員が出席して居られ尚追々とお出になつた方もありました。夫々席が定まり茶菓子や御すしなど運ばれますと、武藤信子の君は会員を代表して開會の趣旨と余に対して御叮嚀なる感謝の辞を述べられました。余は之に対して一言の御挨拶と共に、軍人婦人の心得とも存じまする一二の言を極単簡に御話しまして、後は互いに打とけ膝を交へて新舊の談話を交換しました」。同記事から、当時の支部会は、恩師兼校長の出席を仰ぐ方針であつたことと、旧交を温め親睦会的な雰囲気の中に時事問題や自己研鑽に関わる教示を請う姿勢があつたことが見てとれる。恩師と生徒の関係を再確認する作法は、東京支部会に限らず、他の支部会においてもお決まりの作法であつた。

以上、明治期から大正前期にかけての「集会」（金沢）と「支部会」の活動内容から、当時の同窓会活動への期待は、会の目的のひとつとして「女子ニ関スル事項ヲ講究スル」ことを会則が謳つていたように、卒業後も“学びの場”としての母校との関係を継続させたい点にあつたことが窺える。卒業後に自らの生き方・暮らし方の指針となる準拠集団を渴望していた卒業生にとって「集会」や「支部会」は、母校教育への依存的な関係を継続していく機会であり、卒業後の教師－生徒関係の再構築をする場として位置づけられていたのである。

このような同窓会の性格は、『会誌』の編集にも表れている。例えば、第6号の主記事は「本会記事」のほか、「母校記事」（「運動会」や「演習会」の報告）、「説苑」（「新渡戸博士本校にてせられし講演の大要」）、「教苑」、「文苑」である。編集の主眼は、母校の詳らかな出来事やイベントの報告と共に、時事に応じた啓蒙記事を充実させ、卒業後の教養講座としての機能をもたせることであつた。木村（1992）は、大正中期の婦人雑誌（『主婦の友』等）が高女卒業生をターゲットとして登場し、学校で教化された良妻賢母主義（近代的女性像）を引き継ぐ形での情報空間として機能していたことを指摘したが、同窓会誌はその先駆的なモデルであつた。

### 3.2. 活動への参加機会と参加率

このように、母校と恩師を中心とする同窓会活動は盛んであり、全会員に開かれていたのであるが、会員たちの参加態度はどうであつたのだろうか。1919（大正8）年度の同窓会「総集会」で参加率を算出してみよう。すると、第11回卒業生（明治42年卒）からの参加者は7名であり、これは死亡者を除いて全体の11%（7/63人）にすぎない。当時の金沢在住者は23人、仮に参加者全てがそうであつたとしても30%であり、皆が挙つて「集会」へ参集してつたという状況ではなかつた。

また、先の東京支部会（1914年）では、第15回卒（1913年）迄の参加者は30人であり、参加率は25%（同卒業年度までの東京在住者114人）である。金沢での「集会」参加率と比較して、金沢在住者の場合と同程度の動員率であった。東京在住者は会員が個々に孤立していたのではなく、大正初期には金沢在住者と同じ程度に支部会活動に包摂される機会を享受していたといえる。一方でこれらの数値は、参加機会を利用する人としらない人の格差が少なからずあったことを示している。次の役員の手紙にみるように、同窓会の理念と実態との間には乖離があった。「この会誌も住所不明のために戻りますのが幾冊もありますがそれでは母校との唯一の通信もたえることになりますからどうぞお忙しいでせうが御住所は必ずお知らせ下さい」（『会誌』第13号）。次節では、同窓会活動への会員各人のコミットの度合いとその差異について「会員消息」記事の分析によって検討してみよう。

#### 4. 「会員消息」記事への記載有無の要因

##### 4.1. 幅広い交際圏あるいは情報網はあったのか

各卒業年度のクラス代表者を中心とする情報網は、どの程度の会員をカバーし、どの程度の広がりをもっていたのだろうか。そこで、「会員消息」が独立したセクションとなり、執筆者（「議員」）の個人的な伝手に依存して書かれていた大正前期にスポットをあて、同記事に動静を掲載された会員とそうでない会員との間でどのようなプロフィール上の相違があるのか分析してみよう。

対象は、明治期の卒業生のうち、第11回（1909年）から第14回（1912年）までの卒業生389人（卒業生総数433人のうち死亡者を除く）とする。同時期の会員の年齢は二十歳代から三十歳台前半、上級学校を終え就職、あるいは結婚・出産、と人生の節目を越えた時期にあたる。参照する『会誌』は第16号と第18号とし、記事への記載／非記載の判定基準を「2冊の会誌のうちいずれかに消息の記載があるか否か」とした。なお、「新聞にて承りました」のようなメディア媒体を利用した記事や、「いかゞ遊ばしましたか、ちと御たより下さいませ」など当人の消息不明を伝えた記事は「非記載」扱いとした。なお、「議員」は金沢市（及びその近郊）在住者から同期1, 2名選任されて（「同窓会規則」）いた。

すると、全体の記載率は51%（197/389人中）であり、記載される会員が全体の半数程度に留まっていたことがわかる（表2）。また、会員の現住所別（1919年時点）に記載率をみると、金沢在住者の記載率が63%（80/127人）であり、地方在住者の45%（117/262人）を上回っている。金沢から遠くなればなるほど同窓会との音信

## 明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能

が疎遠になる傾向にあった。では、記事への記載／非記載を規定するプロフィール上の要因は何だったのか。表3は、記事に載るか否かについて、出身背景(族籍[士族／平民]，本籍地[金沢／他地域]，父職業[公務・自由業・会社員／それ以外]，家庭の経済[所得税額])と在学中の学校生活(学業成績[卒業時10段階評定の平均値]，操行査定[甲／乙・丙])，そして同時点の現住所[金沢／他地域]のいずれの要因と関連が深いかを判別分析によってみた結果である。

表2 「会員消息」記事の記載率  
(第11回～第14回卒業生)

1919年住所	卒業回	「消息」の記載			記載率
		有	無	計	
金沢	第11回	12	11	23	63%
	第12回	20	7	27	
	第13回	15	26	41	
	第14回	33	3	36	
金沢計		80	47	127	
他地域	第11回	10	30	40	45%
	第12回	31	23	54	
	第13回	24	70	94	
	第14回	52	22	74	
他地域計		117	145	262	
計		197	192	389	51%

表3 「会員消息」記事への記載者についての判別分析結果

Wilksのラムダ		標準化された正準判別関数係数	
関数の検定	1		関数1
Wilksのラムダ	0.917	1919年時点の住所(金沢/他地域)	0.769
カイ2乗	21.993	族籍(士族/平民)	0.083
自由度	7	本籍地(金沢/他地域)	-0.015
有意確率	0.003	親職業(公務・自由業、会社員/それ以外)	0.144
		出身家庭の経済(所得税額)	0.532
		学力(10段階評定)	0.478
		操行(甲/乙・丙)	-0.077

注) 分析総数は、表2の389人をもとにし、『学級台帳』に納税額、学力、操行査定の各項目のうち1項目でも未記載である者を除外した259人である。また、「所得税」とは第三種所得税のことで、俸給、貸宅地、小作料、商工業などに対して課税される。当時の課税最低限は300円である。

するとまず、同時点において金沢に居住している、という地域要因が最も強い要因である。次いで、在学中の家庭の所得税額の多さと学業成績が影響している。出身家庭の経済的裕福さという要因はフローの財産が多いことであり、職業の種類(公務・自由業などの近代的職業/商業や農業などの旧中産階層)には無関係である。旧身分や本籍地などの属性が影響を及ぼしていないことから、家庭の経済的豊かさが結婚条件として有利に働いた結果、婚家での豊かな生活や社会的地位が活動への積極性を促しているのかもしれない。また、成績の良い者は、女子高等師範などの上級学校へ進学して、高女教員として就職している者が少なくない。記事でも教員となった者(とりわけ母校教員)が会員にとって身近な情報網の結節点であったことを窺わせるケースが見られ、教員という職業が同窓会活動を身近に感じさせたり、周囲の会員から積極的な関与を期待されたりする面があったと思われる。あるいは、在学中に成績の良かったことが、卒業後も同級生間での地位関係に有利に働いていたのかもしれないが、これについては推測の域を出ない。

いずれにせよ、旧身分や本籍地、親職業という過去の属性は、「会員消息」記事への記載の有無には無関係であり、卒業後の居住地や社会的地位がその会員の級友や同窓会へのスタンスを決める上で少なくない影響を及ぼしていることがわかった。

#### 4.2. 対面的出会いが中心

では、消息情報の収集は主にどのようにして行われていたのだろうか。女学生文化を特徴づける手紙や葉書の交換は頻繁になされていたのだろうか。記事内容に踏み込んでみると、次のような特徴が描出される。

第一に、消息情報は「議員」の居住地(金沢)周辺に偏って収集されていたことである。地方在住者の消息も、金沢から地方へ転出したり、あるいは金沢の実家へ一時帰郷したりした際に収集されたケースが少なくない。「ご主人様目出度く凱旋遊ばされ、東京にお勤め遊ばす事となりましたので、〇様には……九月の末彼地へお引越になりました。」(第18号)、「去九月上旬久々にて御帰省お健なお顔を拝し嬉しう思ひました」(第16号)、「夏の時分にはお子様つれましてしばらくお在澤でした」(第18号)、「春の頃御帰省、母校などおたづね下さいました由」(第18号)等。

第二に、情報の収集手段は、対面的接触が中心であり、手紙のやりとりはそれほど頻繁には見られないことである。対面的接触で最もよく記述されるのは、同窓会「集会」や運動会といった公式の会合や行事での出会いである。「此春母校同窓会にて、丁度十何年振にて、御目にかゝりました。」「〇様今秋母校運動会にてお目にかゝ

## 明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能

りなつかしう存じます」,「〇様、いかが遊ばしましたか。運動会にて、一寸御目にかかりましたが、お消息おたづねするひまも無く」等。

これら公式の場での出会いではなく、「過日歌会の席上で、野々市の〇様から〇様の御動静を承り」(第18号),と私的な会合での出会いが伝えられるケースもあるが、存外少ない。また、街頭や近隣での偶然の目撃は重要な情報源であった。「〇様には〇様と御結婚遊ばされ御良人様は医学専門学校に御在学とか、過ぎし夏の夕べ尾張町あたりで御二人の御散歩の御姿をちらと拝見いたしました」等、数多い。

以上のような対面的な出会いのエピソードが数多く紹介されるのに対して、日常的な手紙の交換からのエピソードや、情報収集のために手紙で消息を尋ねるようなことはあまりみられない。「時折の御遊歩のお気に召した眺望を繪ハガキにものしてお送り下さいます」といった折々の交流が伝えられるのは稀であり、「近年は新年の賀状以外はとんと御無沙汰いたしております」の告白のように、記事執筆を担当する責任があったとしても、「〇様には、御卒業後少しもお消息なく、如何にお暮しですか。〇様、〇様、如何遊ばして入らつしやいます。ちと御たより下さいませ」と相手からの便りを待つケースが多く、「〇様は如何に御暮し給ふや御遠方に御住居遊ばせし事とて伺ひ知るべき人もなく先年私より一度御手紙さし上げしかど梨の礫の音もなし」のような執筆者が手紙を出して尋ねるケースは稀である。

これらのことから、大正前期の会員相互の交流は、公式の同窓会や母校行事における対面的出会いを主とするのもで、母校・恩師・在校生を媒介とした地元中心的な情報網を形成していたことがわかった。一方、手紙や葉書を媒介とした地理的に遠く広がる回路は貧弱であった。噂話や伝聞情報も手紙を媒介とするよりも、人の移動によって交換されるケースが多かった。また、金沢在住者同士でも私的な友人関係は別として、同級生一般の相互交流はいたって淡泊であった。「クラス会」といった趣向がどの卒業年度においても一般化し、様々な機会を捉えて開かれ始めるのは昭和期に入ってからであり、広く慣例化するのには戦後になってからである。

## 4.3. 支部活動と「会員消息」記事への記載有無との関係

支部会へ積極的に参加していた者は、金沢の「議員」との間にも緊密な情報回路を有していたのだろうか。また、彼らに共通する特徴的なプロフィールはあるのだろうか。先にみた1914(大正3)年の「東京に於ける済美会支部会」出席者30人と欠席者84人との間で、「会員消息」欄の記載率が異なるかどうか調べてみよう。参照する同窓会誌は前節と同様で、記事への「記載者/非記載者」の判定基準も同様に

した。両時点で居住地が東京ではなくなっている会員もあるが全員含めた。

すると、表4に示すように、支部会出席者の「会員消息」欄への記載率は55%であり、欠席者の場合（40%）よりも高いことがわかる。つまり、地方で同窓生との交流に熱心だった会員は、金沢との間でも比較的緊密な情報回路を維持する傾向にあり、そうでない者は疎遠になる傾向にあった。

次に、支部会参加メンバーの中でも特にリーダーシップを発揮した会員のプロフィールの特徴を掴んでみよう。（以下、個別のプロフィールは氏名をイニシャルで記し、本籍地の区分を、石川県金沢市：「金沢」、石川県各郡：「郡部」、そして「他府県」とし、これに族籍（士族／平民）をクロスさせて、「金沢士族」などと記す。）

表4 大正3年東京支部会出席者の「会員消息」欄記載率

大正3年の会合	「会員消息」記事				
	記載	非記載	死亡	計	記載率
出席	16	13		29	55%
欠席	34	50	1	85	40%
全体	50	63	1	114	44%

注) 第7回と第8回卒業生の場合、『会誌』第18号の記事が欠如しており、また第6回卒業生の場合、第16号と第18号の両方で欠如しているのを、代替として第12号の同記事を利用した。

表5 大正3年東京支部会への出席率

	支部会出席	欠席	計	出席率
上級学校進学者	16	20	36	44%
非進学者	13	65	78	17%
全体	29	85	114	25%

すると、次の点がわかる。第一に、上級学校進学経験者が多いことである。会場が女子高等師範学校の同窓会「桜蔭会」であったことも関係しているのか、出席者の半数が女高師をはじめ日本女子大、東京音楽学校などの上級学校進学経験者で占められている。上級学校進学経験者とそうでない者とで出席率を比較すれば、前者は44%であるのに対し、後者は17%とかなりの差がある（表5）。東京支部会の活動が、上級学校進学者を中心に行われていたことを示す別の例として、1917（大正6）年の会合があげられる。発起人は、TJ（金沢士族、父：医師）とHT（金沢平民、父：大工職）であったが、両者の共通点は日本女子大卒業という点である。会場もHの自宅が供されている。また、1927（昭和2）年の会合でコーディネーターを務

## 明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能

めた WI (郡部平民, 父: 農業) は, 女子高等師範を出て母校の教員を経験し, 当時, 臨時教員養成所助教授を務めながら『会誌』にも度々記事を書き, 昭和期における金沢と東京との結節点となっていた。このように, 上級学校進学を経験したり, 教員 (特に高女教員) であったりして「学校」との関わりが長くなれば, それほど同窓会との関係も近くなる傾向がある。

第二に, 夫の職業が高級軍人や官僚, 大学教授など社会的地位の高い会員のリーダーシップぶりが目立つ。昭和期に入って東京済美会の「重鎮」, 「中心」などと呼ばれるようになった会員の夫職業をみると, まず, 1914 (大正 3) 年の会合の代表であった MN (静岡県士族, 父: 官吏, 新潟県から 3 年次編入) の夫は, 陸軍武官, 後に関東軍司令官, 陸軍元帥となる軍人エリートであり, 当時すでに陸軍大佐であった。次に, MS (金沢士族, 父: 四高校長) の夫は, 内務省官僚 (東京帝大→内務省, 警視總監) であり, 当時警視庁特高課長だった。昭和初期の MS の活躍ぶりは次の通りである。「此頃は東京支部の事やら済美母の會のためやらに映画と音楽の夕の會を催され大に活動して下さいませ」(『会誌』第 27 号), 1928 (昭和 3) 年, 東京支部会で「[MS] の帰朝談あり (姉は昨年軍縮會議の一行に加はれジェノバに行かれし夫君の後をおはれかの地に渡られ今春帰朝せられ……) 御得意の弁舌にて御旅行中の感想や罪なき失敗談などいづれも耳新しく面白く承りました」(『会誌』第 27 号)。そして, 昭和期には「重鎮」として「地方から出て来た女学生を皆よく世話して, 吉凶を共にしていらつしやるので大変忙し」い日々を送った TJ (金沢士族, 父: 医師) の夫は東京帝大教授 (航空研究所所長, 理論物理学) であった。

彼らはそれぞれ出身背景がばらばらであるけれども, 夫はいずれも大正初期には前途有望で確固たる社会的地位を築いており, 彼らの支部会における早くからのリーダーシップぶりが, 夫の地位と無関係であったとは言い難いだろう。『会誌』上で, 高級官僚や大学教授の妻に対して「東都のとりわけ中枢の省に, 重要な職務を帯びさせ給ふ御夫君をもたれ君の未来は, おそらく社交界の花として光りを放たれる」(YS (金沢士族, 父: 医学専門学校教授), 「未来はおそらく外交官夫人として, 社交界に光りをはなち給ふならむ」(KY (金沢士族, 父: 師範学校教諭) などと表現され盛んに称えられるのは, 彼女たちに対する『済美会』員としての役割期待が込められていたのかもしれない。

## 5. 差異化戦略の場として

前節で, 会員ごとに同窓会活動への参加行為や情報回路には少くない格差があ

り、積極的にコミットしていた人々がいる反面、活動には一体化せずに微妙に距離をとっていた人々が背後に控えていることが明らかになった。同窓会員として積極的なコミットの意味は何であったのか、大正期から昭和初期にかけての同窓会をめぐるいくつかの出来事から検討してみよう。

### 5.1. 除名処分者と途中入会者の出現

「済美会」が会員の除名権限を行使し、途中入会の認定をするようになったのは大正期のことである。前者については、当初から同窓会規則にて「会員ノ面目ヲ汚ス行為アルモノハ除名スルモノトス」と規定されていたが、1914（大正3）年、第8回卒の一会員は『会誌』第13号に規定の条文が記載され除名処分となった。東京在住となっていた会員であるが、処分の具体的理由は明示されていない。

舞踏家の高田せい子（第14回卒、高田舞踊研究所創設）も大正期に一時、除名処分になっている。「良妻賢母第一主義の女学校から、こともあろうにはだもあらわに踊る西洋バレエに身を投じた同窓生がいると知れるや、学校、同窓会とも「名誉ある母校の恥」と、当の高田せい子の名を同窓会名簿から抹殺したのである。後に高田の舞踏界での評価が高まると東京の同窓生らが働きかけて除名は解かれるが、今度は一転して「同窓生の誇り」ともてはやされ、済美会の資金集めの公演まで開くようになる。」（北国新聞編集局編、104頁）。高田は、東京音楽学校へ進学中途、帝劇歌劇部第1期生、兄も帝国大学へ進学している教育家族出身であるから、除名理由は、その職業（西洋舞踏）と出演していた浅草オペラの大衆的性格が高女卒に相応しい品格を伴っていないと判断されたためである。

一方、同窓会は、1919（大正8）年から、退学者のうち「三年以上学籍を有せしもの」で希望者には「役員会の決議を経て会費一時納入の上通常会員となすことあるべし」（「済美会規則」）と新たな入会資格の規定を定めている。（後に、在学期間の条件が「二年以上」になる。）明治期の卒業生と同期にあたる新入会員は、大正末期頃から現れ始め、1931（昭和6）年までに12人に及ぶ。この数字は存外少ない。同期の退学者は511人おり、このうち、転学して他の高女を卒業、大正末期にすでに死亡、在学年数が2年未満、といった規定に該当しない者が相当程度存在するだろうが、それでも該当者がこぞって入会した状況ではない。

では、あえて入会の意志を示し認められた人々とは、どのようなプロフィールだったのだろうか。すると、出身背景はまちまちでありながら、夫の職業・地位は地方名士、資産家、軍人で、また子どもは男子なら中学校、女子なら高等女学校に通

## 明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能

学しているケースが多い。例えば、KM(郡部平民，父：航海業)の夫は，明治から昭和期を通して北前船の船主で大地主の資産家(1918(大正7)年石川県多額納税番付第6位)である。「会員消息」欄で夫が実名で記されているが，通例，職業上の地位で呼称される(知事夫人，工学博士夫人等)ので，地元ではそれほどの名士であった。次に，NM(郡部平民，父：水車製綿業)の夫は，金沢商工会議所会頭，「大正15年版石川県資産家名鑑」の「関脇」位，1934(昭和9)年，金沢市長とともに金沢ロータリークラブを設立するなど地域振興の中心人物である。彼女は，「御大家の御夫人としてよく内に外におつとめで御座います」(『会誌』第26号)，「婦人公団体のためにまた社交界に御活動していらつしやいます」(『会誌』第32号)，と自らも地域社会の諸活動にも精を出していた。最後に，KG(金沢平民，父：小物売商)の夫は東大法学部卒，金沢市街鉄道取締役であり，NMの夫と同じく地元政財界のリーダーの一人であり，彼女も「御繁忙な御主人様に内助の功をお返し遊ばす傍ら奥様はまた多方面の婦人会或は社会事業にお尽力なさつてそれは〜〜おつとめです」(『会誌』第26号)と社会活動に精を出していた。

彼らは，現在の地位や境遇の面で現会員と同等，あるいはそれ以上だと自負して“気後れ”なく会員の仲間入りを果たしたのだろう。その社会的背景として，愛国婦人会の活動に見られるように，社会連帯思想に基づく大正中期以降の社会事業活動(良妻賢母思想や婦徳の普及活動)が地方にも奨励され広がっていったことがあろう。そのような中，婚家の高い社会経済的地位や相応の教育文化程度を同じくする者同士の交際の方が広がってきていたと考えられる。夫の社会的立場を支え内助の功を発揮することを求められる妻として，婦人会活動や社会事業への参画を求められていたとするならば，同窓会への加入はそのような社会活動の一環として彼女たちの中で自然に意識されていたのかもしれない。

新入会員の認定と除名処分の発動，という正負2つの出来事は，大正期から昭和初期にかけて，高女卒以上の学歴を持ちかつ婚家の社会的地位も高い人々が，そうではない人々とは区別されるべき文化や教育観をもったひとつの階層であると自覚されるようになったことを物語っている。そして同窓会の一連の動きは，社会的な差異の表示記号としての「済美会員」という資格水準を維持し高める差異化戦略をとったものと理解できよう。

## 5.2. インフォーマルな「クラス会」の端緒

大正末期から昭和期に入ると，同級の特定の仲間による恩師を排したタイムリー

な会合が、東京や金沢をはじめ地方在住者の中でも流行するようになる。大正期の半ば頃までみられた「平常家事にとりまぎれ、外出も余りいたさず、とかく耳うとき私」(『会誌』第18号)のような家庭に引き籠もる姿は影を潜め、「早春一月〇〇様御帰省を幸に私の宅にてクラス会を開きました」(『会誌』第32号)のような行動的な姿が現れる。この自由闊達な活動は、生活水準の向上や余暇活動のスタイルの変化といった外部的な環境の変化も後押ししている。大正期の「職員層」<sup>(4)</sup>の生活様式の変化を婦人雑誌(『主婦の友』)の記事から分析した寺出(1982)によれば、同層は大正末期にかけて、音楽、ダンス、旅行、スポーツといった多様な生活行動を実現していった(「生活の余暇化現象」)からである。そこで、インフォーマルな同級生同士の交流を行い始めた“火付け人”たちのプロフィールをみてみよう。

その端緒は、第6回卒の東京在住者が大正の初め頃に始めたクラス会で、「毎月御集合が在るのみならず、時には御良人とも打揃ふての御会合」(『会誌』第12号)を催していた。(メンバーには4.3.で既出のHTとNSがいる。)その後、「在京第9回の級會」が生まれたのは1928(昭和3)年であり、毎月1回の頻度で会合を定例化するようになった。メンバー構成は、在京者16人のうち「級會出席者の常連」が11人、「御家庭の都合上當分の缺席者」が4人、他の1人は「ロンドン御滞在お留守」であったから、かなり凝集性の高い集団であった。「発意」人はSF(金沢平民)で、夫は東京市助役であり、また、「主人の地位も家の財産も一切平等」と謳われながら、「ロンドン御洋行中の旦那様」「宏壮なしつとりと渋い洋館を御建てになつて」「立派な日本造りのお住ひ」等、所属階層は高かった。

このように、インフォーマルな会合の“火付け人”においても特徴的なプロフィールは、夫の社会的地位が高く、経済的にも豊かな上層の階層に所属していたことである。彼らの活動は、当初は、夫の社会的地位に付随する社交圏の一つとして同窓会活動を取り込んだようであったが、次第に、級友たちとの“横の関係”を意識しながら、自身の余暇活動の一つとしてクラス会を楽しみ継続的な交流を図るようになった。このような会合がとりわけ首都圏在住の富裕な成功者の妻に好まれた理由は、親睦組織でありながら母校文化との共通の関わりを接点とすることで、手軽に他の集団との差異化を図り、かつ自尊心を満たすことのできる会合であったからだろう。

### 5.3. 人生の挫折と同窓会からの距離

一方、同窓会活動に積極的にコミットはせず、微妙な距離を置いて、「消息」記事

## 明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能

にもあまり記載されない会員の交友関係はどのようであったのだろうか。一事例として、自叙伝『晩霜』（1971、自費出版）の著者KA（第12回卒、金沢士族、父：医師）と取り上げる。

文学や音楽に才能を発揮し学力・操行共に優秀であった彼女は、記念式典では学年総代として祝辞を演説するなど女学生界のヒロインであった。進学した東京音楽学校では校友会誌の編集委員も委嘱され「前途は洋々としているかに見えていた」彼女は、まさに「社交界の花」の卵であった。ところが現実の人生は、文士との交際・恋愛がきっかけで音楽学校を退学、挫折を乗り越え小学校教員として自立と再起を模索する苦難の戦前期を過ごすことになる。彼女の同窓会との関係は、かつてのヒロインからは想像できないほど疎遠である。音楽学校を退学後、名古屋で小学校教員として就職するまでの期間、『会誌』の現住所欄は「不詳」を示す空白が続き、消息記事も書かれていない。もともと同窓会活動や雑誌投稿に興味がなかったわけではなく、それどころか卒業の翌年の『会誌』第10号に、「生命」と題する短歌を投稿するなど、誌上を通じた言論・文学交流には大いに興味を示すところであった。また、母校や恩師との関係・交流も他の卒業生に比べ親密であった。ところが、音楽学校を退学してから戦前期まで社会的な自立を求める苦闘の期間中は、同窓会活動の表舞台には立っていない。

では、級友との私的な親しい関係はどのようであったのだろうか。自叙伝の「あとがき」には「お友達」として8人の名前があるが、そのうち4人は女学校の同級生（SF, NO, KM, NR）である。4人は皆、成績・操行共に優秀、彼女と同程度であったから、互いに認め合い、趣味や嗜好にも共通したものがあつたのだろう。ところが、4人との交際は、幼馴染みのNRを除いて戦後に再会して始まったようである。その根拠を示そう。『会誌』第27号の消息記事で、「KA様お便りは頂きませんでした。W様とは折々お目もじ遊ばす由でやはり学校おつとめにて洋装が大層お似合ひとの事で御座いました。」とKAの「消息」が記されている。この記事を書いたのはSFであるが、情報提供者は当時KAと同じ名古屋在住のWであることから、SFとKAとの間に交際や文通は無かったと考えられる。次は、戦後の1958（昭和33）年の記事である。「昨年はKM様、KA様ご帰省の折クラス会し楽しい思出。……（中略）……KA様卒業後初めて会う。」。この記事の執筆者は、NOである。「卒業後初めて会う」との記述から、KAとNOの交際は戦後かなり経過してからであることがわかる。ひょっとしてKMとKAの交際もこの会合がきっかけであったかもしれない。自叙伝の執筆は1968（昭和43）年であるから、高々戦後10年間ばかりの

交際であったわけである。

女学生時代の親しい友人との未長い交際、という幸せは、彼女の場合、卒業後数十年経った戦後になってようやくスタートしたのである。いいかえれば、KAを中心とする級友たちとの親密な交際圏は、戦後になって新たに創出されたものであって、戦前の社会関係がご破算になり、“気後れ”なく参加できる社会的条件が揃ってから、ようやく彼女は懐かしい女学生時代へ回帰できたのである。

## 5. おわりに

小論は、石川県立第一高等女学校同窓会『済美会』を対象に、近代社会における高女同窓会の果たしてきた機能を概観しながら、明治期から戦前期における高女卒の学歴と社会参加との関係について、その社会的な意味を考察してきた。

明治期から大正期の半ばにかけての同窓会は、母校や恩師を中心とした教師—生徒関係の延長として組織され、会員たちが母校教育との関わりを維持し続けることで、「第一高女卒業生」としての矜持や誇りを保ち、卒業後も家庭や地域社会にあって教養を磨き、望ましい近代的な女性像を日々模索しながら実践する意欲を引き出す機会を提供していた。そして、大正後期からは、全国各地の支部会結成やインフォーマルなクラス会の催しにみるように、同窓会活動が魅力ある余暇活動の一つとしても位置づけられ、親睦的な集いを演出するようになった。

このような華やかで緊密な交流を窺わせる活動記録にもかかわらず、小論は、たとえ“第一高女卒”という共通したアイデンティティを持っていたとしても、同窓会活動に積極的にコミットしようとする態度や帰属感には、会員各人によってかなりの温度差があったのではないかと問題提起を行った。すわなち、第一に、大正前期における同級生相互の情報回路は、手紙や廻章の交換が少なく、在学中の交際圏の延長線上に結ばれ全国に広がっていたというよりも、母校行事や同窓会での対面的出会いを主とする地域中心的なものであったことを明らかにした(4.1., 4.2.)。第二に、各会員の同窓会活動に対する態度が、在学中の親密な交友関係や“女学生文化”の延長線上に広がっていたというよりも、夫の職業や社会的地位に付随する妻の地位、あるいは自身の職業的性格といった現実生活のポジションに則して決定されていたことを明らかにした(3.2., 4.3.)<sup>(5)</sup>。

大正期の半ばすぎから昭和期にかけて、高級官吏や高級軍人、大学教授、資本家といった日本の近代化・産業化を主導する人々の輪郭がくっきりと顕わになり、「新中間層」の増大に伴うエリート／非エリートの社会経済的格差が目立ってくるにし

## 明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能

たがい、同窓会は、成功したエリートの「妻」を中心に、社会的に自立した女性（高女教員など）を含む女性の親睦組織として、そうではない者を巧みに排除しながら、より相互の親密さを増しかつ強固になっていった。彼らにとって、同窓会活動を利用し、情報の回路を広げ諸活動に参画することは、男性の職業的地位に代わる「地位表示的機能」としての意味をもったものであった。そして、同窓会活動は、彼らアイデンティティを模索する一連の過程で、自己の社会的なポジションを確認するための差異化戦略の場としても機能していたと考えられるのである（5.1., 5.2.）。

ところで小論は、同高女の『学籍簿』類の個票データを分析した一連の研究のひとつでもある。女学生の在学時に焦点を絞った研究（井上 2004, 2005）では、出身階層による家庭の教育観や文化的エートスの少なからざる相違が析出されてきたのであるが、卒業後のライフコースに焦点を移した小論では、女学校生活を過ごした共通体験をベースにして出身背景に由来する差異が薄められあるいは無化され、その代わりに——同窓会活動への態度という一側面ではあるが——結婚後のライフスタイルの在り方が女性の社会参加への意識や態度の形成において少なからざる影響を及ぼしていたことが析出された。

近代日本の中流に位置する女性の嗜みや教養をはじめ趣味や余暇活動の醸成、社交圏の形成といった階層文化の解明は、出身家庭の躰や学校文化のみならず、婚家や自身の職業生活における社会との関わりという観点が重要であることを小論は示すことができた。今後、この観点からの実証研究の積み重ねが必要となろう。

## 〈注〉

- (1) 近年、男性をメンバーとする諸集団の社会的ネットワークの動向に着目した文化研究に着手され始めている。井上（2006）や実業家の茶事や宴席など伝統文化への接近の意味を彼らの社交空間との関係から分析した永谷（2007）などである。
- (2) 高女卒の学歴が結婚による階層上昇にプラス要因として作用することを論じたのは山本・福田（1987）である。だが、「父」と「夫」の職業分類上の相違を示したのみで資産や地位データは含まれていない。せいぜい「夫」の新中間層比率が高いことが解読できる程度であり、産業構造と職業構造の変化が考察外となっている。また、深谷（1981）は、「愛国婦人会」の幹部や地方組織の長の属性から「既存の女子教育体制に対応して、学歴を社会的にうらうちする機能を演じた」（深谷、215頁）と指摘するに留めている。高女卒の学歴と女性の階層上昇や社会的活動との関係を緻密な実証データで論じた研究は皆無である。

- (3) 同データによれば、生徒の出身背景(旧身分や親職業)は、士族と平民、名士・富豪から官吏・教員まで多様で、主要なグループとして、金沢出身の士族で公務・自由業、金沢出身の平民で商工業、郡部出身の平民で農業、郡部出身の平民で商工業、他府県出身で公務・自由業、といった属性が析出されている(井上 2004)。また、商工業層のうちおよそ3分の2が小規模な事業者(商工会議所に非加入)である(井上 2005)。
- (4) 「職員層」とは、1922年に東京市社会課において実施された『東京市及隣接町村・中等階級生計費調査』で規定された官吏、公吏、警察官、中等教員、小学教員、会社員、銀行員の7職種を代表とする階層である。
- (5) この結果は、戦後の女学校同窓会を取材した先行研究とは異なる。同窓生がひとしく、女学生時代の趣味文化やスポーツの思い出を親しみの共通の感情として帰属感を高め交流するという現象は、きわめて戦後的な風景なのかもしれない。

#### 〈文献〉

- 深谷昌志, 1981, 『増補 良妻賢母主義の教育』黎明書房。
- 北国新聞編集局編『済美に集う』北国新聞社, 1981年。
- 木村涼子, 1992, 「婦人雑誌の情報空間と女性大衆読者層の成立—近代日本における主婦役割の形成との関連で—」『思想』812, 231-252頁。
- 稲垣恭子 他, 2004, 『関西地域における高等女学校の校風と女学生文化に関する教育社会学的研究』平成14~15年度科学研究費補助金研究成果報告書。
- 稲垣恭子, 2007, 『女学校と女学生』中公新書。
- 井上好人, 2004, 「「操行」査定からみた女学生の中途退学—明治期の石川県立第一高等女学校の事例—」『教育社会学研究』第74集, pp. 229-247。
- 井上好人, 2005, 「明治期商工業層とその子女の高等女学校進学との相関関係—石川県立第一高等女学校の事例による仮説—」『ソシオロジ』154号, pp. 37-51。
- 井上好人, 2006, 「近代日本の「流動エリート」と郷友会ネットワーク」『教育社会学研究』第78集, pp. 191-212。
- 貫田優子, 2007, 「高等女学校同窓生集団の文化と構造—京都府立京都第一高等女学校卒業生調査から—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第53号, pp. 379-390。
- 佐藤裕紀子, 2004, 「大正期の新中間層における主婦の教育意識と生活行動: 雑誌『主婦之友』を手掛かりとして」『日本家政学会誌』Vol. 55, No. 6, pp. 479-492。
- 黄順姫, 2007, 『同窓会の社会学』世界思想社。

明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能

寺出浩司, 1982, 「大正期における職員層生活の展開」日本生活学会編『生活学』  
7, ドメス出版, 34-74頁。

山本禮子・福田須美子, 1987, 「高等女学校の研究 (第二報) - 高女卒業生アンケート調査から -」『和洋女子大学紀要』第27集, 107-134頁。

---

ABSTRACT

**Social Signification of Alumni Associations of  
Prewar Girls' Middle High Schools: The Case of  
Ishikawa Prefectural Daiichi Girls' Middle High School**

**INOUE, Yoshito**

(Kanazawa Seiryō University)

Ushi 10-1, Gosho Town, Kanazawa City, Ishikawa Pref., 920-8620, Japan

E-mail: inoue@seiryō-u.ac.jp

This study explores how schoolgirls in the Meiji era (1868-1912), who were the first generation of girls to attend school, associated themselves with their alma maters after graduation, and what networks they developed with their former teachers and classmates. More specifically, the report examines whether their circles of close friends characterizing schoolgirl culture were maintained and expanded after graduation or whether their real lives and social positions specified their networks after graduation. The paper looks at Saibi Kai (Saibi Society), the alumni association of Ishikawa Prefectural Daiichi Girls' Middle High School, and examines how the Meiji-era alumnae were involved in the alumni association networks from the Taisho (1912-1926) to the prewar Showa period (1926-1989), by analyzing the "news on members" column in the alumni bulletin. The results clarified the following points:

1. In examining the development of class reunion networks during the first half of the Taisho period, this study focused on the differences in profiles between members whose up-to-date information appeared in the column and those whose information did not, and used this to extract some characteristics of the networks. This examination shows that members' involvement in the network was largely affected by residence in Kanazawa City (regional factor), their locality, and good academic achievement during their school days, and not by such factors as their social status under the old system and legal domiciles in the family registry. The members also retained their connections through formal exchanges such as class reunions and sports meetings, rather than through such informal means as letters and postcards. In other words, they formed a network where information on members was exchanged through activities in Kanazawa City, the location of the school, [m1] which functioned as the center of the network.
2. The author also analyzed the profiles of members who had taken leadership in formal activities and members who had developed strong connections through informal gatherings. The analysis shows that many of the husbands of such members enjoyed prestigious social statuses, as high-ranking military officials, bureaucrats, university professors, and so on, and that the first generation of schoolgirls enjoyed rich, privileged lives.